

# 保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の開発

柏まり\* 岩佐和典\*\* 佐藤和順\*

**要旨** 本研究は、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートに関する測定尺度を開発し、その因子構成と信頼性を検討することを目的とする。全国の未就学の子どもを持つ父親と母親、1,133名を対象として質問紙調査を実施した。因子分析の結果、「保育の専門家による育児ヘルプ」因子、「精神的サポート」因子、「居場所作り」因子、「短時間の託児」因子、「身近な人による育児ヘルプ」因子の5因子、計22項目からなる「保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度」が開発された。分析によって得られた各因子についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、作成された尺度には一定の信頼性が備わっていることが確認された。以上により、本研究において作成された保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度は、未就学の乳幼児を有する親の育児支援ニーズを測定するに相応しいものであると考えられる。

**キーワード**：保育施設，育児ソーシャル・サポート，尺度開発，子育て支援

## I. 問題の所在

子育て家庭を取り巻く環境は、子育てに厳しい状況である。子育て期の世帯構成は、核家族化が進行している。また、転勤や住環境の為、祖父母と同居・近居ができない家庭も増え、心を許せる近親者や親しい友人からの育児支援が得にくい家庭もある。希薄化する地域コミュニティにおいて、母親が新たな人間関係づくりに難しさを感じることは想像に難くない。孤立した母親は、必要な育児支援が得られず、子育てへの不安や負担感を増大させる。閉鎖的な子育て環境が子どもに適切に関われなくなる程の不安やストレスを慢性化させ、児童虐待の誘因となっているとの指摘もある。母親への育児負担を緩和する取り組みは、子育て家庭支援における急務的課題である。

男女雇用機会均等法の制定により女性の社会進出が進み、父親の育児休暇取得率の促進が課題とされている。父親の育児参画を支援する取り組みは、母親の育児負担の緩和につながるものである。しかし、父親の中には、子どもの年齢や発達に即した接し方や子どもが泣いた時の対応等への不安から育児に消極的な父親もいる。地域との繋がりが薄い父親の中には、家庭以外で子どもと安心して過ごせる遊び場や施設に関する情報が得にくいために、どこで

何をして過ごせばよいかかわからず積極的に行動できない場合もある。また、母親は一人の時間が欲しいと感じていても、子どもを父親に任せることへの不安や子育てへの役割意識によって、一人での外出や子育てから解放される時間をつくることへの抵抗感がある。こうした、父親・母親が求めている子育て支援ニーズのズレによって、子育て家庭が持っている子育て機能が十分に発揮できていないことが、母親への子育て負担の偏りを常態化させる一因となっている。

ソーシャル・サポート（社会的支援）は、母親の育児不安を軽減させるために有効であることは、様々な先行研究からも明らかである（牧野1982, 川井他1994, 野口2000, 荒牧2008）<sup>1)2)3)4)</sup>。子育て支援に特化するならば、配偶者である父親からの育児ソーシャル・サポートが、母親の育児不安や育児ストレスの緩和要因として着目されている。手島・原口（2003）は、子育てにおける社会的支援として育児ソーシャル・サポートに着目した研究を行い、育児ソーシャル・サポートが育児不安の緩和に有用であると指摘している<sup>5)</sup>。また、渡辺・石井（2010）は、育児ソーシャル・サポートが子育て中の母親の育児ストレスに与える影響について研究し、母親にとって身近な存在によるソーシャル・サポートは母

\* 岡山県立大学 保健福祉学部

\*\* 就実大学 教育学部

親の自己効力感を高め、結果的にストレス反応を軽減させることを明らかにした<sup>6)</sup>。

これまでの子育て支援研究は、子育ての主体を母親と位置づけ、母親の子育て支援ニーズを測定する尺度開発が主流であり、父親・母親の双方を対象とした子育て支援ニーズを測定する尺度はまだない。そのため、母親が求める支援ニーズを把握することはできても、母親の子育て負担を緩和するには至っていないのが実情である。また、配偶者である父親からの支援の必要性が確認されていても、父親の育児参加に関する実現可能な支援策や父親の育児不安への対応策についての検討が十分なされているとは言えない。このことから、父親・母親の双方を対象とした子育て支援ニーズの測定尺度を開発し、子育て支援ニーズを共有化することによってズレを解消できると考える。

保育施設は、子育て中の父親・母親が集い、安心して子どもとともに過ごすことのできる地域の子育て支援拠点と位置付けられている。父親・母親の努力だけでは健全に子育てを遂行することが難しい現代において、子育て家庭が支援を必要とする時に、必要な支援を得ることができる社会的支援として、保育施設は子育て公助の役割を担っている。そのため、子どもの成長発達に応じて変化する子育て家庭への支援ニーズを補完する総合的な支援施設として、保育施設の利用が考えられている。しかし、父親・母親が必要としている子育て支援ニーズのズレを解消し、子育て家庭への支援ニーズを補完する保育施設の役割に着目した研究はみられない。このことから、子育て家庭に内在する支援ニーズを把握するためには、子育て公助の役割を担う保育施設における子育て支援項目を含めた測定尺度の開発が必要と考える。

そこで、本研究では、子育て家庭における子育て機能を補完する保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の開発を試みるものである。

## II. 研究の目的

本研究は、子育て家庭が抱える育児負担や育児不安等を緩和し、子育て家庭に対する支援内容の充実を図るために、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートの開発を目的とした研究の一部である。本研究では、手島・原口(2003)が開発した「育児ソーシャル・サポート尺度」<sup>7)</sup>をもとに、新たに

保育施設における子育て支援項目を加え、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の因子構造と信頼性について検討することを目的とする。

研究を通して子育て家庭に内在する支援ニーズを父親・母親の双方を観点として顕在化し、子育て公助の役割を担う保育施設が補完すべき支援内容について把握を試みる。

## III. 研究の方法

### 1. 調査概要

本研究は、全国の未就学の子どもを持つ保護者を対象として Web 調査を実施した。調査方法は、研究対象者へアンケート案内メールを配信し、URL アクセス法により回答を求めた。調査は、2015年9月にアンケートを配信し、10月上旬を回収期限とした。

### 2. 調査項目

本研究の調査項目は、以下のとおりである。

- (1) 回答者の属性について
- (2) 子育て意識と育児ソーシャル・サポートの必要性について

### 3. 尺度項目について

親の育児不安の緩和要因を探る尺度として、手島・原口(2003)の「育児ソーシャル・サポート尺度」を用いる<sup>8)</sup>。育児ソーシャル・サポート尺度は、①精神的サポート、②育児ヘルプ、③居場所づくり、の3つの下位因子によって構成されている。原口・手島(2006)で用いられた20項目と新尺度開発のために新たに追加した7項目を合わせた全27項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを程度に従い4件法を用いて得点を付する。

本調査は就学前の乳幼児を持つ父親・母親を調査対象としていることから、回答者本人を「あなた」、その夫・妻を「配偶者」と表記する。さらに、子育て家庭における子育て機能を補完する保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度を開発するために、設問12の「育児の仕方を相談できる人」として「保育者」を加筆するとともに、設問14～20に、保育施設及び保育者に関する7項目を追加して、調査を試みる。追加した設問は、次のとおりである。

【追加項目】

- 設問 14. 子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家（保育者）が身近にいる
- 設問 15. 子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家（保育者）が身近にいる
- 設問 16. 子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある
- 設問 17. 子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある
- 設問 18. 子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある
- 設問 19. 子育てについて専門的な知識を得る機会がある
- 設問 20. 短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある

4. 分析方法

本研究では、先行研究によって開発された育児ソーシャル・サポート尺度を手がかりとして新たに保育施設に関する項目を追加し、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の開発を試みる。そのため、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の因子構造を最小二乗法による因子分析によって明らかにする。その結果得られた因子構造にそって下位尺度の $\alpha$ 係数を算出し、それらの内的整合性を検証し、信頼性について検討を試みる。

IV. 結果

1. 回答者の属性について

回答者数は、1,133名であり、回答者全員が未就学児を有する子育て中の保護者である。調査対象者の属性では、性別に大きな偏りはなかった。子育てに関する調査は、母親を対象とするものは多くあるが、父親と母親の双方を対象とした研究は少ない。年齢では、10代から60代までの全ての年齢層から回答を得ることができた。未就学児を育児する親の年齢層に広がりがあることは、現代社会における晩婚化、高齢出産等の実情とも重なるものと言える。世帯構成では、「夫婦と子ども」が全体の83.4%を占めており、核家族世帯が一般化した子育て家庭の実情が認められた。回答者属性に関する結果の詳細は、表1～表4に示したとおりである。

表1：性別 (単位は%)

|      |      |
|------|------|
| 男性   | 女性   |
| 51.7 | 48.3 |

表2：年齢 (単位は%)

|     |            |            |            |            |            |            |            |           |
|-----|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|
| 10代 | 20～<br>24歳 | 25～<br>29歳 | 30～<br>34歳 | 35～<br>39歳 | 40～<br>44歳 | 45～<br>49歳 | 50～<br>59歳 | 60代<br>以上 |
| 0.2 | 2.1        | 24.4       | 10.8       | 16.2       | 25.1       | 7.0        | 13.5       | 0.9       |

表3：世帯構成 (単位は%)

|    |            |              |                        |     |
|----|------------|--------------|------------------------|-----|
|    | 夫婦と<br>子ども | ひとり親<br>と子ども | 子どもと親とその親<br>(実父母・義父母) | その他 |
| 全体 | 83.4       | 3.3          | 12.1                   | 1.2 |

表4：子どもの数 (単位は%)

|      |      |      |     |     |
|------|------|------|-----|-----|
| 1人   | 2人   | 3人   | 4人  | 無回答 |
| 46.7 | 40.2 | 10.4 | 2.6 | 0.1 |

2. 尺度分析について

先行研究の因子の内容から、育児ソーシャル・サポート尺度を構成する因子間には、一定の相関関係があると考えられるため、本研究では、因子分析を行う際に最小二乗法及びプロマックス回転を用いて因子を抽出した。その結果、5因子を抽出した。

手島・原口（2003）によって開発された育児ソーシャル・サポート尺度は、「育児ヘルプ」・「精神的サポート」・「居場所づくり」の3因子構造であったが、保育施設に関する項目を加えて再検定した結果、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度として、第一因子「保育の専門家による育児ヘルプ」、第二因子「精神的サポート」、第三因子「居場所作り」、第四因子「短時間の託児」、第五因子「身近な人による育児ヘルプ」の5因子が抽出された。

さらに $\alpha$ 係数を算出した結果、各因子の内的整合性は高いと考えられた。因子分析の結果の詳細は、表5に示したとおりである。

3. 分析過程

具体的な分析過程は、次の①～⑤のとおりである。  
①固有値1.0以上を基準としたところ、5因子の抽出が妥当と考えた。累積寄与率は61.084%であった。  
②5因子で抽出したところ、設問2、8、9、20については、因子負荷量が低い（.40以上）ため除外し

表5：育児ソーシャル・サポート因子抽出結果

|   | 因子負荷量 |       |       |       |       | 共通性  |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|------|
|   | I     | II    | III   | IV    | V     |      |
| <b>I. 保育の専門家による育児ヘルプ (<math>\alpha = .918</math>)</b> |       |       |       |       |       |      |
| Q23. 24. 子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある。                    | .830  | .043  | -.052 | .071  | -.117 | .677 |
| Q23. 26. 子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家(保育者)が身近にいる。        | .814  | -.013 | .017  | -.067 | .144  | .743 |
| Q23. 25. 子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある。                     | .794  | .027  | .003  | .005  | -.082 | .585 |
| Q23. 27. 子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家(保育者)が身近にいる。            | .790  | .019  | .034  | -.062 | .138  | .715 |
| Q23. 22. 短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある。                      | .735  | -.035 | .002  | .096  | -.087 | .529 |
| Q23. 21. 子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある。                 | .729  | .010  | -.041 | -.002 | .108  | .633 |
| Q23. 23. 子育てについて専門的な知識を得る機会がある。                       | .652  | .017  | .036  | -.070 | .192  | .547 |
| <b>II. 精神的サポート (<math>\alpha = .814</math>)</b>       |       |       |       |       |       |      |
| Q23. 6. 子どもの心配事があるとき配偶者に相談できる。                        | -.061 | .791  | .064  | -.064 | .202  | .732 |
| Q23. 5. その日の子どもの様子を夫婦で話し合うことができる。                     | -.002 | .763  | .052  | -.105 | .207  | .696 |
| Q23. 10. 配偶者はあなたをよく理解してくれる。                           | .004  | .732  | .030  | -.038 | .124  | .610 |
| Q23. 13. 配偶者はあなたの代わりに育児や家事ができる。                       | .127  | .718  | .025  | .092  | -.303 | .472 |
| Q23. 1. 私一人で子どもを育てている。                                | .039  | -.520 | .250  | -.113 | .396  | .319 |
| <b>III. 居場所作り (<math>\alpha = .822</math>)</b>        |       |       |       |       |       |      |
| Q23. 11. 同じ年くらいの子どものもつ親と話す機会がない。                      | .011  | .107  | .805  | .034  | -.113 | .661 |
| Q23. 14. 同世代の子どもを持つ家族とのつきあいがいい。                       | .000  | .016  | .797  | .054  | -.083 | .644 |
| Q23. 7. 同じ年くらいの子どものと遊ばせる機会がない。                        | -.089 | .028  | .713  | -.003 | .137  | .507 |
| Q23. 18. 子育てのことを継続的に話せる機会がない。                         | .077  | -.085 | .622  | .033  | -.124 | .426 |
| <b>IV. 短時間の託児 (<math>\alpha = .797</math>)</b>        |       |       |       |       |       |      |
| Q23. 16. 歯医者や美容院などに行きたいとき、預かってくれる人がいる。                | -.011 | .042  | .057  | .770  | .175  | .764 |
| Q23. 4. 短時間でも預かってくれる人が近くにいる。                          | .016  | -.094 | .074  | .692  | .169  | .568 |
| <b>V. 身近な人による育児ヘルプ (<math>\alpha = .816</math>)</b>   |       |       |       |       |       |      |
| Q23. 19. 子どもの心配事があるときに相談できる人がいる。                      | -.010 | .040  | -.103 | .207  | .681  | .700 |
| Q23. 15. 子育てをする中で感じた事を安心して話すことができる人がいる。               | -.026 | .144  | -.073 | .208  | .619  | .673 |
| Q23. 12. 母乳育児や離乳食など子育てについて話し合える人が身近にいる。               | .145  | -.016 | -.128 | .127  | .510  | .478 |
| Q23. 3. 育児の仕方を相談できる人(例: 医師, 保健婦・保育者等の専門家)がいる。         | .230  | -.069 | .056  | .041  | .490  | .392 |
| <b>因子間相関</b>  |       |       |       |       |       |      |
|   |       | I     | II    | III   | IV    |      |
|   | II    | .271  |       |       |       |      |
|   | III   | -.069 | -.086 |       |       |      |
|   | IV    | .405  | .360  | -.134 |       |      |
|   | V     | .499  | .460  | -.124 | .479  |      |

た。また、設問 17 については、共通性が低い（2 未満）ため除外した。

③上記項目を削除し、再度因子分析を行ったところ、表 5 の結果となった。

④第二因子は、先行研究における「精神的サポート」、第三因子は「居場所作り」の項目で構成されているため、先行研究と同様の因子名とした。

第一因子は、設問 24「子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある。」、設問 26「子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家（保育者）が身近にいる。」、設問 25「子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある。」、設問 27「子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家（保育者）が身近にいる。」、設問 22「短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある。」、設問 21「子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある。」、設問 23「子育てについて専門的な知識を得る機会がある。」の項目で構成されており、「保育の専門家による育児ヘルプ」と命名した。

第四因子は、設問 16「歯医者や美容院などに行きたいとき、預かってくれる人がいる。」と設問 4「短時間でも預かってくれる人が近くにいる。」から構成されるため、「短時間の託児」と命名した。

第五因子は、設問 19「子どもの心配事があるときに相談できる人がいる。」、設問 15「子育てをする中で感じた事を安心して話すことができる人がいる。」、設問 12「母乳育児や離乳食など子育てについて話し合える人が身近にいる。」、設問 3「育児の仕方を相談できる人（例：医師、保健婦・保育者等の専門家）がいる。」から構成されるため「身近な人による育児ヘルプ」と命名した。

⑤各因子について  $\alpha$  係数を算出し、信頼性の検討を行ったところ、「保育の専門家による育児ヘルプ」(.918)、「精神的サポート」(.809)、「居場所作り」(.822)、「短時間の託児」(.797)、「身近な人による育児ヘルプ」(.816) の全ての因子で、内的整合性が高いと判断された。

## V. 考察

本研究は、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートに関する測定尺度を開発し、その因子構造と信頼性について検討することを目的とした。因子分析の結果、「保育の専門家による育児ヘルプ」因子、「精神的サポート」因子、「居場所作り」因

子、「短時間の託児」因子、「身近な人による育児ヘルプ」因子の 5 因子、計 22 項目からなる「保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度」が開発された。

具体的な下位因子項目の内容は、次のとおりである。

第一因子：「保育の専門家による育児ヘルプ」

保育施設および保育の専門家による育児支援に関する項目

第二因子：「精神的サポート」

特に身近な配偶者からの精神的支援に関する項目

第三因子：「居場所作り」

父親・母親が子どもと一緒に集い交流できる環境に関する支援に関する項目

第四因子：「短時間の託児」

父親・母親が必要な時に安心して子どもを預けられる託児に関する支援に関する項目

第五因子：「身近な人による育児ヘルプ」

配偶者・保育の専門家とは異なる人による育児支援に関する項目

さらに、抽出された 5 因子について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出し信頼性の検討を試みた結果、高い水準により内的整合性が満たされていると判断されたことから、作成された尺度には一定の信頼性が備わっていることが確認された。

以上により、本研究において作成された保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度は、未就学の乳幼児を有する親の育児支援ニーズを測定するに相応しいものであると考えられる。

本研究を通して開発された保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の特徴として、次の 2 点があげられる。

①父親・母親の双方を観点とした子育て支援のニーズを測定することができる。父親・母親の子育て支援ニーズを測定し、子育て家庭における支援ニーズを明らかにすることにより、父親・母親の間に内在する意識のズレを顕在化することができる。

②保育施設に求められる子育て支援内容を具体的に把握することができる。保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度を用いて子育て家庭が抱える課題やニーズを測定し、可視化することによって、保育施設に求められる支援内容を具体的に把握することができる。したがって、保育施設による一方向的な支援提供だけではなく、子育て家庭と

保育施設が相互補完的に必要な支援の提供が可能となる。

このように父親・母親を子育ての主体として位置付けながらも、保育の専門家が補完的役割を担うことで安定的な子育て支援の提供が実現できると考える。保育施設における社会的支援を受け、子育て家庭の環境が改善されることで、父親・母親が共助する子育てが可能となり、母親への育児負担の緩和につながるものとする。保育施設が子育て支援の拠点となり、子育て家庭が本来もっている共助機能が発揮されることで、子どもの成長発達に望ましい子育て環境を安定的に提供できると考える。

今後は、子育て支援を実施する保育施設において質問紙調査を実施するためには、尺度項目を精選することで回答者の負担を軽減し、尺度の精度を高めることが不可欠である。また、父親・母親の子育て意識との関連についても分析を行い、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートの有用性についても検討を進めていく予定である。

## VI. 文献

- 1) 牧野カツコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要, 3: 34-56.
- 2) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子ほか (1994). 育児不安に関する基礎的検討. 日本総合愛育研究所紀要, 30: 27-39.
- 3) 野口真弓, 新川治子, 多賀谷昭 (2000). 育児をする母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態. 日本赤十字広島看護大学紀要, 1: 49-58.
- 4) 荒巻美佐子 (2008). 育児感情尺度. 堀洋道 (監修), 松井豊, 宮本聡介 (編). 心理測定尺度集VI 現実社会とかかわる〈集団・組織・適応〉. サイエンス社, 219-224.
- 5) 手島聖子, 原口雅治 (2003). 乳幼児健康診査を通じた育児支援—育児ストレス尺度の開発—. 福岡県立大学看護学部紀要, 1: 15-27.
- 6) 渡辺弥生, 石井睦子 (2010). 乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について. 法政大学文学部紀要, 60: 133-145.
- 7) 手島聖子, 原口雅治 (2003). 前掲書.
- 8) 手島聖子, 原口雅治 (2003). 同上書.

## 付記

本研究は JSPS 科研費 26350058 の助成を受けたものである。

## Development of a Scale to Measure Childcare Social Support based on Childcare Facilities

MARI KASHIWA\*, KAZUNORI IWASA\*\*, KAZUYUKI SATO\*

*\*Faculty of Health and welfare Science, Okayama Prefectural University*

*\*\*Faculty of Education, Shujitsu University*

**Abstract** The purpose of this research was to develop a scale to measure childcare social support based upon childcare facilities and discuss its factor structure and reliability. A questionnaire survey was conducted nationwide on 1,133 parents who have children of preschool age. As a result of factor analysis, a “scale to measure childcare social support based on childcare facilities” consisting of five factors, “childcare help by Childcare facilities teacher”, “mental support”, “making a place to childcare”, “Short-time care services” and “childcare help by close person” and 20 items in total were developed. As a result of the calculation of Cronbach’s alpha of the factors obtained by the analysis, it was confirmed that the scale thus created had certain reliability. Consequently, the scale to measure childcare social support based on childcare facilities, created in this research, is considered to be appropriate to measure the needs of parents who have children of preschool age for childcare support.

**Keywords** : Childcare facilities, Childcare social support, Scale to Measure, Childcare support